

# 第一章 柏木の物語 女三の宮の結婚後

[第一段 六条院の競射]

「\*ことわりとは思へども、うれたくも言へるかな(もつともだとは思ふが、厭味ったらしく言つて来たもんだな)。いでや、なぞ、かく異なることなきあへしらひばかりを慰めにては、いかがが過ぎさむ(いいや、何でこんな通り一遍の返事だけを慰めにして納得してられようか)。かかる人伝てならで、一言をものたまひ聞こゆる世ありなむや(こんな人伝ではなしに、一言でも直にお話し申し合える折があつてほしいものだな)」 \*注に<主語は柏木。小侍従の返事をさす。「若菜上」巻末の小侍従の手紙の文面を直接受けた語り出し。>とある。というか、こんな書き出しになる巻立てや章立てのほうが変だ。せめて、この章は「若菜上」巻の十三章からの話と同巻に収めるべきだ。特にこの巻は「若菜の上下巻」と表題された中での下巻という巻立てで、尚且つそれぞれが長編であり、連続している話とは言つても、話題の転換や年代わりなどで、もう少し区切りの良い分け方はある筈だ。と言つても、頼みの写本がそうなつていて、今更言つてもどうにもならない面もあるんだろうが、所詮は写本で原本ではない、という視点に立つ重要性を再認識させてくれる箇所、とも言えるのかも知れない。ただ、総合的な見直しで全体を整理するには、まだ解明されていない相当量の資料研究が必要とされるんだろうな、多分。

と思ふにつけて(と藤原君は小侍従の返事を見て思いながら)、おほかたにては、惜しくめでたしと思ひきこゆる院の(基本的には尊敬し素晴らしいと思ひ申し上げる六条院の)御ため、なまゆがむ心や添ひにたらむ(御恩に仇する邪心が芽生えたようです)。

晦日の日は(つごもりのひは、三月晦日は)、人びとあまた参りたまへり(高官たちが大勢六条院に参りなさいました)。なまもの憂く、すずろはしけれど(藤君は邪念があるので気が晴れず、華やかな集いは空々しい気がしたが)、「そのあたりの花の色をも見てや慰む(宮の御前の庭の桜の色を見て宮を偲ぶことにするか)」と思ひて参りたまふ(と思つて参上なさいます)。

\*殿上の賭弓、如月にとありしを過ぎて(参内資格者たちによる弓競技会が二月にと予定されていたのを中止になつて)、\*三月はた御忌月なれば(さんぐわちはたおんきづきなれば、三月は今上帝の母后藤壺の御命月で御所行事が控えられたので)、口惜しくと人びと思ふに(残念に人々が思つていた所に)、この院に、かかる\*まとゐあるべしと聞き伝へて、例の集ひたまふ(この六条院でこうした的射の集いが催されると伝え聞いて、いつものように集まりなさいます)。 \*「殿上の賭弓」は注に<「賭弓」そのものは正月十八日に弓場殿で帝出御のもとに競射が催される。「殿上の賭弓」はそれに準じて殿上人が行う競射。二月三月に催されることが多い。>とある。「賭弓」は「のりゆみ」と読みがある。物を賭けて勝負する、という意味の「賭る(のる)」という動詞もあるようだ。祝詞(のりと)などに通じる占い神事が語源だろうか。現代語に繋がる語感は無い気がする。 \*「三月はた御忌月なれば」は注に<冷泉帝の母后藤壺の忌月。>とある。 \*「まとゐ」は「円居」と「的射」の掛詞的表現。と注にある。

左右の大將(さいうのだいしゃう、左右の近衛府長官が)、さる御仲らひにて参りたまへば(源氏殿の婿殿と子息なので揃つて参上なされたので)、\*次將たちなど(すけたちなど、中將少將の次官たちを)挑みかはして(競い合わせて)、\*小弓とのたまひしかど(殿は座興の小弓遊びでもと仰つていたが)、\*歩弓のすぐれたる上手どもありければ(彼らは近衛の弓の名手たちであつたの

で)、召し出でて射させたまふ(前庭に各人を名指しで呼び出して本格風に競技をさせなさいます)。\*「次将(すけ)」は近衛府では、左右に各定員一名の中将と各定員二名の少将が正員とあり、他に権官もあったらしいが、此処では正員全員が集まったとして各三名の計六名で競技したものと考えてみる。しかし、近衛府の高官全員が六条院に集結するなどということは、有り得ないと言うか、御所以外で有ってはならないことのように私には思える。\*「小弓(こゆみ)」は座しての射を競う遊戯、とのこと。「小弓とのたまひしかど」は注にく「若菜上」(第十三章四段)の源氏の言葉に見える。>とある。若菜上十三章四段では、つい先日のことになるが、「弥生ばかりの空うらかなる日、六条の院に、兵部卿宮、衛門督など参りたまへり」とあり、その際に殿が「今朝、大将のものしつるは、いづ方にぞ。いとさうざうしきを、例の、小弓射させて見るべかりけり」と呼び掛けていた。ただ、その日は蹴鞠遊びの日となって、猫騒動もあり、改めて今日の日を迎えた、という文意らしい。\*「歩弓(かちゆみ)」は古語辞典にく「徒歩で弓を射ること。」とあり、注にはく「歩弓」は「馬弓(騎射)」の対語。十七日の射礼、十八日の賭弓なども歩射である。>とある。が、此処の文意を見る限りは、遊びの「小弓」ではなく、本式の弓競技としての「歩弓」、という言い方に聞こえる。いわゆる弓道に近いもの、戦の鍛錬としての射的なのだろう。ただ、そうすると前庭で競技できたのものなのか少し疑問だが、所詮は真似事ではあったか。

殿上人どもも、\*つきづきしき限りは(中級役人たちも次将たちに続くを自負する者たちばかりが次々と)、皆\*前後の心、こまどりに方分きて(それぞれが一对戦ごとに左右いずれかの勝ち星を積み重ねて)、暮れゆくままに(興じるままに日も暮れて)、今日にとぢむる霞のけしきもあわたたしく(今日で春が終わるといふ霞の景色が惜しまれて)、乱るる夕風に、\*花の蔭いとど立つことやすからで(桜を散らす夕風に花見の席を立つことが容易く出来ずに)、人びといたく酔ひ過ぎたまひて(見物の高官たちは酷く酔い過ぎなさって)、\*「つきづきし」はくいかにもふさわしい、好ましい>と古語辞典にある。となると、この場に見合ったそれなりの身分の者、であったり、六条院との親しさ、みたいにも感じられるが、此処では弓の心得がある者、がこの場に相応しい、という語用らしい。確かに、自負のある者たちが闘志を燃やせば競技が白熱して面白くなりそうだが、「つきづきし」という語にそこまでの語感、私は感じない。分かり難い言い方だ。いっそ私は、その「自負」を補語して「つきづきしき限り」をく次将たちに次々に続く蔵人舎人たち>と読んでみる。\*「前後の心(まへしりへのこころ)こまどりにかたわく」は注にく左方の先に射る者、右方の後に射る者と、奇数偶数の二組に分けること。>とある。が、是が一对戦ごとに勝敗を付けて全体の星数で左右の勝負を決するのか、単に左方の次は右方という射手の順番のことで勝負は総得点の差で決するのか、そのいずれかなのか、その両方なのか、実は分からない。で、「前後の」をく先攻後攻の一对戦の>、「心」をく結果を>、「こまどり」をく小間(小さな単位)取り(ごとに)>、「方に分く」をく左右いずれかの星数にする>、と読めば前者の意味になり、是が具体的な対戦方法を説明していることになる。ただ、どちらのルールでも、終盤前に大差が付くと競技全体に締まりが無くなるので、多くの場合、小者は前哨戦扱いで、最後の大将戦で全体の勝負を決する、という工夫が施される。言はば、全ては大将を担ぎ出す為の御膳立てという演出だ。そうすれば、およその人にそれぞれの立場に応じた出番が用意される。本番には有り得ない茶番だが、是で勝者も敗者も笑える。本当の戦争は、どうやら勝者も笑えないらしい。\*「花の蔭いとど立つことやすからで」は注にく「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」(古今集春下、一三四、躬恒)。>が参照指摘される。確かに、「今日にとぢむる霞のけしきもあわたたしく」からの文は洒落た言い回しだ。この歌があったから晦日に設定したのだろう。「やすからで」の「で」はく打消の助動詞「ず」に接続助詞「て」が付いたものの音便>と古語辞典にある。

「艶なる\*賭物ども(美しい弓試合の懸賞品の衣類の数々は)、こなたかなた\*人びとの御心見えぬべきを(勿体無くもこの六条院の、こちらやあちらの御部屋様方の御見立てに拠る物らしいの

を)、\*柳の葉を百度当てつべき舎人どもの(百発百中の腕前の近衛武官たちが)、\*うけばりて射取る、\*無人なりや(是幸いと出張って射取って行くのも、当たり前に過ぎて面白くない)。すこし\*ここしき手つきどもをこそ、挑ませめ(すこし覚束無い手つきの者たちにこそ、競わせようじゃないか)」 \*「賭物」は「かけもの」と読みがあり<勝負事や遊戯などに賭ける品物>と古語辞典にある。この「賭物」は同じ意味で「のりもの」という言い方もあるようだ。 \*「人びと」は六条院の御部屋様方らしい。 \*「柳の葉を百度当てつべき」は注に<『史記』周本紀の楚の養由基の故事。>とある。「養由基の故事」は、養由基が百歩離れた柳の葉を「百発百中」させた弓の名手だった、という話らしい。 \*「受け張る」は<事を一手に引き受けて我が物顔に振舞う。でしゃばる。>と古語辞典にある。此処を出番と打って出る、ような語感。 \*「無人」は「むじん」と読みがあって、大辞泉には「無心」の項に<気が利かないこと。無風流。>などとある。 \*「ここし」は「子子し」で<子供っぽい、おうようだ、おっとりしている>と古語辞典にある。

とて(という話になって)、大将たちよりはじめて、下りたまふに(両大将をはじめにして高官たちが庭へ下りなさるが)、衛門督、人よりけに眺めをしつつものしたまへば(衛門督の藤原君が他の人とは際立って沈んだ表情をしていらっしやったので)、かの片端心知れる\*御目には、見つけつつ(その理由の一端に心当たりのある源君の目には、気になって)、 \*「おんめ」は注に<夕霧をさす。>とある。

「なほ、いとけしき異なり(やはりだいぶ様子が変だ)。わづらはしきこと出で来べき世にやあらむ(面倒なことが出て来そうな気配だな)」と、われさへ思ひつきぬる心地す(と自分まで悩みが付いてしまった気分がします)。

この君たち、御仲いとよし(この両君はとても仲が良いのです)。\*さる仲らひといふ中にも(従兄弟同士の中でも)、心交はしてねむごろなれば(気心が通じ合って親密なので)、はかなきことにて、もの思はしくうち紛るることあらむを、いとほしくおぼえたまふ(ちょっとしたことでも一方が物思いに悩んでいそうなのを同情なさるのです)。 \*「さる仲らひ」は注に<従兄弟同士という意。>とある。源君から見て藤君は伯父の子、藤君から見て源君は故叔母の子。また、源君の妻は藤君の腹違いだが妹なので、義兄弟でもある。

みづからも(藤君自身も)、大殿を見たてまつるに(源氏殿の御顔を拝せば)、気恐ろしくまばゆく(後ろめたく正視出来ずに)、

「かかる心はあるべきものか(こんな気持ちが許されるはずは無い)。なのめならむにてだに(目立たないことにできえ)、けしからず(間違ったことはせず)、人に点つかるべき振る舞ひはせじと思ふものを(人に非難される行いはしないように思っているのに)。ましておほけなきこと(宮を寝取ろうなどとは、まして大それた事だ)」

と思ひわびては(と思ひあぐねては)、

「かのありし猫をだに、得てしがな(あの日の猫だけでも得たいものだ)。思ふこと語らふべくはあらねど(話し相手になる筈も無いが)、\*かたはら寂しき慰めにも、なつけむ(独り寝の寂しさを慰めるのに手懐きたい)」 \*「かたはら寂し」は<(形シク) そばにいるべき人がいなくて何となくもの寂しい。独り寝でももの足りない。>と大辞林にある。

と思ふに、もの狂ほしく(と思うと抑え切れず)、「いかでかは盗み出でむ(何とか盗み出そう)」と(と思うが)、それさへぞ難きことなりける(それさえ出来ないことなのでした)。

[第二段 柏木、女三の宮の猫を預る]

\*女御の御方に参りて、物語など聞こえ紛らはし試みる(そこで藤の君は右の衛門府の長官として御所に出仕なさった際に、実の妹である今上帝の女御の弘徽殿の御部屋に参上して、近況のお話しなどをお聞かせ申して気を紛らわそうと試みます)。

いと奥深く、心恥づかしき御もてなしにて、まほに見えたまふこともなし(弘徽殿女御はたいそう慎み深く、気が引けるほど畏まった御面会ぶり、直接顔をお見せなさることもありません)。かかる御仲らひにだに、気遠くならひたるを(このように実の兄妹の仲でも、互いの身分と立場を尊重して、節度に気を使うのを習わしにしているのを)、「\*ゆくりかにあやしくはありしわざぞかし(宮が御姿をお見せになったのは、不用意で変ではあったことだった)」とは、さすがにうちおぼゆれど(とは、さすがに思われたが)、\*おぼろけにしめたるわが心から(宮をととても深く思い込んでいる感情から)、浅くも思ひなされず(藤君は宮に配慮が足りないとは思えないのです)。\*「ゆくりか」は<思いがけないさま。にわかなさま。不用意なさま。>と古語辞典にある。成り行きで、とか、成り行き任せで、とは別の語類なのだろうか。だとしたら、現代語に繋がる語感が分からない語だ。\*「おぼろけ」は、下に「ならず」と打消語があれば<並大抵なさま>の意味であり、下に打消語がなければ<並大抵でないさま>の意味になる、と古語辞典に説明される。此处では打消語が無いので、「おぼろけに」は<並大抵でなく、たいへんに>という語用らしい。既に何度も出て来ている語だが、未だに語感が掴めない。言ってもしょうがないが、私は嫌いな語だ。是が出て来る度に、暫くの時間、感触を掴もうと試考せざるを得ず、結果いつも成果が無い。「しむ」は「染む、浸む」で<心に深く染みる→深く思い入る>ということらしい。

春宮に参りたまひて(次いで皇太子がお住まいの梨壺に参上なさって)、「論なう通ひたまへるところあらむかし(皇太子は姫宮の腹違いながらほぼ同年齢の兄宮でいらっしゃるのだから、論ずるまでもなく似ていらっしゃる所があるだろう)」と、目とどめて見たてまつるに(と藤君は春宮のお顔を細かく拝し奉ると)、匂ひやかになどはあらぬ御容貌なれど(華やかな見映えなどはないお顔立ちだが)、さばかりの御ありさまはた、いと異にて(これほどに高貴な方の御表情はやはりそれは格別で)、あてになまめかしくおはします(上品で優雅でいらっしゃいます)。

内裏の御猫の、あまた引き連れたりけるはらからどもの(天皇の御猫が何匹も一緒に御所に連れて貰われて来た兄弟猫たちが)、所々にあかれて、この宮にも参れるが(あちこちに別れて引き取られて、この皇太子の所にも来ていたものが)、いとをかしげにて歩くを見るに(とても可愛らしげに歩くのを見ると)、まづ思ひ出でらるれば(藤君はやはり姫宮の猫が思い出されるので)、

「六条の院の姫宮の御方にはべる猫こそ、いと見えぬやうなる顔して(あまり見慣れない顔立ちで)、をかしうはべしか(面白く思いました)。はつかになむ見たまへし(わずかですがお見受けしました)」

と\*啓したまへば(と皇太子に申し上げると)、わざとらうたくせさせたまふ御心にて(皇太子は猫をととても可愛がりなさる御性分なので)、詳しく問はせたまふ(詳しくお聞きなさいます)。 \*

「啓す」は三宮(太皇太后・皇太后・皇后)・皇太子・上皇などに申し上げる。天皇には「奏す」という。と古語辞典にある。臣下が天子に申し上げる、という特別な語らしい。ただ是は、大和言葉としての敬愛の念ではなく、漢学からの輸入文化なのだろう。インテリの形式主義という特権階級に都合の良い優越性を助長するもので、知識を自分で組み立てて物事を自ら解決する責任ある立場を避けて、多くの知識に触れ得る富裕層の仲間意識に安住する、という輸入文化の弊害を感じさせる特主語で、元の中国に於いてすら身分制を守る為に考案された特殊語の趣があるものかも知れない。が、中国では妙な国内内規など、外部勢力に跡形もなく消し飛ばされたのだろうが、島国日本では妙な内規が本当に奇妙に残りがちだ。戦争が無い世界を長く安定的に経営するには、客観的な事後検証が可能な個人名を明記した記録が必ず必要だ。今や政争で個人は命や財産までは失わないのなら、せめて名誉に恥じない生き方を担保しなければ、物理的には人類の生存を不可能にする核爆弾や核施設を既に一部の人間は所有してしまっているのだから、人類は個人を守って総体を失いかねない。凶らずも、福島第一原発の全電源喪失は、その現実を露呈した。しかし、宇宙規格では核融合反応は日常的な安定した物理作用だ。核反応制御技術は人類が必ずや獲得すべき動力源だ。安定運用は勿論、廃棄物処理も恒久的に解決しなければならない。しかし、確立されていない技術を安易に日常の動力源に、どうして出来るのか。実験は厳密に管理された施設で成されなければならない。狭量な権威主義者は恥を知れ。歴史書は勝者が敗者を裁いてきたが、今こそ、時の権力を誰が操作したのかを、誰が何処で何を決定し、誰が何を施行したのかを、複数の視点で正確に記録しなければならない。責任を果たすべき立場にいた者が何もせずいた重罪は必ず歴史に裁かれなければならない。

「唐猫の、ここのに違へるさましてなむはべりし(唐の猫で日本の猫とは違う種類のもののようにでした)。同じやうなるものなれど(同じようなものですが)、心をかしく人馴れたるは(気性が可愛く人懐こいのは)、あやしくなつかしきものになむはべる(ずいぶん気持が惹かれるものと存じます)」

など(などと藤君は)、ゆかしく思さるばかり(皇太子が興味をお持ちなさるようと)、聞こえなしたまふ(答え申しなさいます)。聞こし召しおきて(皇太子はこの話をお聞き置きなさいと)、桐壺の御方より伝へて聞こえさせたまひければ(桐壺妃から姫宮に伝えて御所望を申し入れ為さったので)、\*参らせたまへり(姫宮は兄宮の皇太子に猫を献上なさいました)。\*「まゐらす」はく差し上げる。献上する。>と古語辞典にある。

「\*げに、いとうつくしげなる猫なりけり(本当にとても可愛げのある猫なこと)」と、人びと興ずるを(と皇太子付きの女房たちが愛でるのを)、衛門督は(衛門督の藤原君は)、尋ねむと思したりき(姫宮に所望してみようとお思いだった)と、御けしきを見おきて(と先日の皇太子の御様子を見て取って)、日ごろ経て参りたまへり(数日経て梨壺に伺いなさいました)。\*「げに」は注にく東宮方の人々の詞。「げに」は柏木の言葉に納得する気持ちの表出。>とある。

\*童なりしより(藤君は子供のときから)、朱雀院の取り分きて思し使はせたまひしかば(朱雀院が特に気に入って側仕えさせていらっしやったので)、御山住みに後れきこえては(院が山の寺に御入山あそばした後は)、またこの宮にも親しう参り(今度はこの皇太子の所に親しく参じて)、心寄せきこえたり(院の御一族に敬愛を示し申ししていました)。\*「童」とは何歳の時からだろうか。「童殿上」はく平安時代以降、宮中の作法の見習いのため、公卿の子弟が、元服以前に昇殿を許されて奉仕すること。また、その子供。殿上わらわ。>と大辞林にあり、元服前で作法見習いが務まる年齢だと10歳くらいだろうか。藤原君は、ほぼ26歳。皇太子は15歳。仮に16年前のことだとすれば、皇太子が生まれる前夜あたり。朱雀帝の御世で

ある事は勿論だが、源氏殿が 25, 6 歳の頃であり、何と正に須磨流浪の時代に当たる。藤原殿は左家の筆頭であり、右家の時代にあつて源氏殿に同調する立場となつて閑職に追い込まれて、韻塞ぎ(漢文名句の伏文字当て遊び)に興じ合つていたという記事が賢木卷六章の二、三段にあつたが、その時の宴席で「中将(藤原殿)の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、「高砂」を出だして謡ふ、いとうつくし。大将の君(源氏殿)、御衣脱ぎてかづけたまふ」とあつたのは非常に印象的な場面で、藤原殿の二郎君の優れた資質が際立っていた。が、なぜ二郎君なのか。長子はどうしたのか、という疑問は当時から気になっていた。この藤原兄弟の母腹である「四の君」は右家の女であり、朱雀帝の叔母だった。朱雀帝の御世は右家の時代だが、左家の藤原殿には食い込める手駒は残されていた。基本的には冷遇された左家だが、長子が帝に気に入られていたことは大事な希の綱だったに違いない。長子の一郎たる藤原君も自覚したのだろう。王家に仕える、王家に繋がる、ということ自らの使命だと幼くして受け止めた、ということだ。そして、藤君にとっての王家とは、朱雀帝血筋となつたのだろう。そういう立場に自分の息子を追い込んだ藤原殿は、その息子の立場を十分に理解して、姫宮との婚儀を必死になつて進めるべく、朱雀院や源氏殿に働き掛けなければいけなかつたのではないか。思慮不足が惜まれる。藤原殿の無策が、弘徽殿女御の中宮位獲得の失敗に続いて、藤原君の焦燥を煽っているようで、行く末が案じられる。いや、何も私は左家に同情する縁者ではないが、話の展開として。

御琴など教へきこえたまふとて(御琴などを教え申しなさるといふ事で参じては)、

「御猫どもあまた集ひはべりにけり(御猫たちがたくさん集まっていますね)。いづら、この見し人は(どこにいますか、私が会つた人は)」

と尋ねて見つけたまへり(と藤君は姫宮の猫を探して見つけなさつて)、いとらうたくおぼえて、かき撫でてあたり(とても可愛く思えて掻き撫でて居ました)。

宮も(皇太子も)、

「げに、をかしきさましたりけり(確かに変わった形をした猫だ)。心なむ、まだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらむ(気性がまだ懐かないのは人見知りしているのだろう)。ここなる猫ども、ことに劣らずかし(此処に居る他の猫たちも特に見劣りしないとは思ふが)」

とのたまへば(と仰れば)、

「これは、さるわきまへ心も、をさをさはべらぬものなれど(猫はそのような人見知りする知恵もなかなかござらぬものなれど)、その中にも心かしこきは、おのづから魂はべらむかし(その中でも賢いものは自然と素質があるのでしょう)」など聞こえて(などと藤君は申し上げて)、

「まさるどもさぶらふめるを(こちらには他に優れた猫どもが居るようですから)、これはしばし賜はり預からむ(この猫は暫くお許し願つて預かりたいです)」と申したまふ(と申しなさいます)。

心のうちに、あながちにをこがましく、かつはおぼゆるに(藤君は内心でいやに強引な申し出に我ながら思えたが)、これを尋ね取りて(この猫を手に入れて)、夜もあたり近く臥せたまふ(夜も寝所で近くに寝かせなさいます)。

明け立てば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ(夜が明ければ猫の世話をし撫でて食事を与えなさいます)。

人気遠かりし心も、いとよく馴れて(人見知りしていた猫の気性もとても良く馴れて)、ともすれば、衣の裾にまつはれ、寄り臥し睦るるを(ともすれば裾にまとわりついて側に寝そべって甘えるのを)、まめやかにうつくしと思ふ(藤君は本当に可愛いと思います)。

いといたく眺めて(とても物思いがちに庭を眺めて)、端近く寄り臥したまへるに(縁側近くの廂に寝そべっていらっしやると)、来て(猫が来て)、「\*ねう、ねう(にやうにやう)」と、いとらうたげに鳴けば(ととても可愛らしく鳴くと)、かき撫でて(藤君は掻き撫でて)、「(寝よう寝ようと鳴くとは)\*うたても、すすむかな(ずいぶんと積極的だな)」と、ほほ笑まる(と微笑みます)。  
\*「ねうねう」は注に<猫の鳴き声。擬音語。柏木は「寝よう、寝よう」の意に解す。>とある。 \*「うたて」は事の進展が<とても早い>。「すすむ」は程度が<とても増す>。伏せられた主語は<欲情>だ。今でもこの主語は多く伏せられる。

「恋ひわぶる人のかたみと手ならせば、汝よ何とて鳴く音なるらむ (和歌 35-01)

「恋人代わりのこの猫の、にゃーごにゃーごの甘え声 (意識 35-01-1)

「恋人代わりのこの猫の、盛りの声のはしたなさ (意識 35-01-2)

\*この歌の遊び心は「汝よ何とて鳴く音なるらむ(なれよなにとてなくねなるらむ)」のナ行重ねが、そのまま猫の鳴き声を模しているという趣なのだろう。だから、「手ならせば」と三句の条件付けが生きる。こういう技巧歌は言い換えが利かない。文意で言い換える。

\*これも昔の契りにや(こんな風に猫が誘い声で鳴くのも、前世の縁で結ばれた姫宮と自分との運命だろうか) \*注に<歌の後の独り言。「これ」は猫との縁をさす。>とある。が、「これ」は姫宮の猫が藤君に「寝よう寝よう」と鳴くことだろうに。だから、自分は姫宮と<寝ることになる運命にある>と、藤君が自分を暗示に掛けようとする言い方、でなければ面白く無い。

と、顔を見つつのたまへば(と藤君が猫の顔を見ながら仰ると)、いよいよらうたげに鳴くを(猫がますます甘えて鳴くのを)、懐に入れて眺めゐたまへり(懐に入れて姫宮を思っていたらっしやいました)。

御達などは(藤君の女房たちは)、「あやしく、にはかなる猫のときめくかな(何だか急な猫好きぶりだこと)。かやうなるもの見入れたまはぬ御心に(こうしたものには興味をお持ちでなかった御気性なのに)」と、とがめけり(と不審がりました)。

宮より召すにも参らせず(皇太子が猫を返すようにおっしゃってもお返し申さず)、取りこめて(藤君は猫を取り込んで)、これを語らひたまふ(話し相手になさいます)。

[第三段 柏木、真木柱姫君には無関心]

左大将殿の北の方は(現下の藤原右家筆頭である左大将殿の夫人である源氏殿の養女は)、大殿の君たちよりも(おほとどのきみたちよりも、実父の藤原殿の御子息たちよりも)、右大将の君をば(源氏殿の嫡男である右大将の君の方を)、なほ昔のままに(今でも姉弟として親しんだ昔のままに)、疎からず思ひきこえたまへり(身近に思い申しなさっていらっしやいました)。

心ばへのかどかどしく(夫人は気配りにそつが無く)、気近くおはする\*君にて(親しみのある方なので)、対面したまふ時々も(御会いなさる時も)、こまやかに隔てたるけしきなくもてなしたまへれば(御簾で嚴重に顔を隠すこともなく几帳越しで応対なさるので)、大将も(源君の方も)、淑景舎などの、疎々しく及びがたげなる御心ざまのあまりなるに(腹違いながら血を分けた兄妹の桐壺妃などが格式張って近づきにくい御態度が過ぎるので)、さま異なる御睦びにて、思ひ交はしたまへり(両者は風変わりな御親しい間柄同士に思い付き合っただけでいらっしやいました)。 \*「きみ」は「左大将殿の北の方」のことらしい。注に「玉鬘についていう。」とある。文脈と文意からはそれとわかるが、「君」は「姉君」という語用のようで、それなら「姉君」とあれば分かり易いのに、「君」だけでは源君のことと混同し易い。こういうちょっとした分かり難さが重なって、文意まで相当に分からなかったことが既に何度もあったし、これからもまたありそうだ。

男君(夫君の左大将は)、今はまして(今はますます)、かのはじめの北の方をももて離れ果てて(あの式部卿宮家の女である最初の夫人をすっかり見限って)、並びなくもてかしづききこえたまふ(この藤原姫である源氏養女を比べるまでもない正妻として遇し申しなさっています)。この御腹には(この夫人が御産みになったお子たちは)、男君達の限りなれば(男の子ばかりなので)、さうざうして(左大将は物足りなく思って)、かの\*真木柱の姫君を得て(あの前夫人との間に儲けた真木柱の姫君を自家の娘として)、かしづかまほしくしたまへど(嫁に出してやりたいとお思いになったが)、祖父宮など(おほちみやなど、姫の祖父に当たる式部卿宮は今手許で育てているその姫を左大将家に渡すことなど)、さらに許したまはず(決してお許しなさらず)、 \*「真木柱の姫君」については、注に「真木柱の姫君」の呼称は、巻名にもとづくものか。当時、十二、三歳であったから、現在十六、七歳になっている。」とある。「巻名にもとづくものか」という注釈は、この巻の作者が真木柱巻の作者とは違う、という事を指摘しているのだろうか。その可能性は有り得ると思うが、紫式部の直筆原本は無いのだから、幾つかの写本の元々が複数の作者による合作や寄せ集めだったとしても不思議はないし、その辺の追求は限界がある気がする。それだけに永遠の謎でありうるという強烈な存在感だが。ともあれ、これが数少ない作者自らの命名規定だとして、真木柱巻三章三段に前夫人が子供を引き連れて実家に帰る際に、この姫君は「今はとて宿かれぬとも馴れ来つる真木の柱はわれを忘るな」(和歌 31-06)と詠んでいたのだから、巻名に基づくというよりは、この歌詠みに基づくということは間違いない。

「この君をだに、人笑へならぬさまにて見む(この姫君だけは、残念なことになった娘とは違って、物笑いにならないように嫁がせよう)」



と思し、のたまふ(とお考えになり、仰います)。

\*親王の御おぼえいとやむごとなく(王家の男宮の御身分の高さはそれは大変なもので)、内裏にも、\*この宮の御心寄せ、いとこよなくて(帝におかれてもこの式部卿宮への御好意はこの上なくて)、このことと奏したまふことをば、え背きたまはず(宮がこうと上奏なさることには帝は反論なさらず)、心苦しきものに思ひきこえたまへり(恐縮してお聞きなさいます)。\*おほかたも今めかしくおはする宮にて(広く宮中においても地位の高い宮でいらして)、\*この院、大殿にさしつぎたてまつりては(六条院、太政大臣に次ぎ奉って)、人も参り仕うまつり(高官たちも日参申して)、世人も重く思ひきこえけり(世間も大変に尊敬申し上げていました)。\*「親王の御おぼえいとやむごとなく」は一般論なのだろうか。であれば、この「おぼえ」はその身分や地位に対する世間ないし制度上の<評価>であり、「御」はその親王自身を示す敬語だから、「御おぼえ」で<御身分の高さ>という事かと思う。訳文もそう取っているようだ。だから一応は訳文に従うが、「親王」というだけでは、形式上はともかくも、後ろ盾の無い「無品親王」は有力者の慈悲に縋るしかない屈辱的な立場にあった、とは桐壺巻において早くも語られていたところであり、今更に此处でこういう一般論を持ち出す意味は分からないし、語り口調としても唐突感がある。最近では便利なもので、Web でいくつかの写本古本の画像が公開されているので、どんなものかと見てみたが、「親王の御おぼえ」が「みこのおぼし」やら、判読不能やらで手応えが無い。尤も、手応えというほどの「手」は私には無いが、要するに疑問のまま残っている。\*「この宮の御心寄せ」は式部卿宮にたいする帝の御好意・御信頼。注には<式部卿宮は冷泉帝の母藤壺の兄すなわち伯父にあたり、その娘が王女御として入内もしているという関係。>とある。実母の兄だから血筋も近く、且つ義父でもあるという縁の濃さ。\*「おほかたも」は「内裏にも(うちにも)」に対する言い方で<世間一般に於いても>という意味、かとおもう。ただ、此处で言う「世間」は御所内や宮中や、せいぜい城内の語感。政府内と言っても良いくらいのようなのだが、六条院源氏殿は政務の役は超えている。\*「この院、大殿にさしつぎたてまつりては」は注に<式部卿宮は、源氏、太政大臣家に次ぐ、第三の権勢家。「濔標」巻以来変わらない地位を確保。鬚黒左大将より上格。>とある。

大将も(だいしゃうも、姫の実父である左大将殿も)、さる世の重鎮(さるよのおもし、将来の国家の重鎮)となりたまふべき\*下形なれば(と成り為さるべき有資格者なので)、姫君の御おぼえ、などでかはかなくはあらむ(姫君の御評判がどうして軽いものでありましようか)。\*「下形(したかた)」は<下地、素質>と古語辞典にある。此处では<候補者、資格者>あたりか。

\*聞こえ出づる人びと、ことに触れて多かれど、\*思しも定めず(姫に求婚を申し出る上流貴族の男たちは色々な手づるを伝えて多く在ったが式部卿宮はなかなか相手をお決めなさいません)。衛門督を(衛門督の藤原君を)、「さも、けしきばまば(その気であるなら、婿に迎えたい)」と思すべかめれど(と式部卿宮はお思いのようだったが)、猫には思ひ落としたてまつるにや(藤原君は真木柱の姫君を猫ほどには興味をお向け申し上げないようで)、\*かけても思ひ寄らぬぞ、口惜しかりける(少しも思いを寄せないとは残念なことでした)。\*「聞こえ出づる人びと」は注に<真木柱の姫君に求婚する人々。>とある。文脈無しでは絶対にそうは読めない文だ。が、文脈上はそう読める。これ自体は古文の難しさでは無い。こんな言い方は現代語にも、というか恐らくどんな言語でも日常的にあるだろう。上の文意に続く事柄では可能な限り重複を避ける。むしろ、それが簡素で誤解を生まない分かり易い言い方だ。が、古文では一つづつ確認しながら読み進まねば成らない語や文法の不明箇所が非常に多く、なかなか一気に文を読み下せず、細切れに読み進めることになりがちだ。で、行き成り「聞こえ出づる人びと」から読み始めると、何のことか面食らう。それでもやはり、上の文は日常語のように、とても読み下せない。残念だ。\*「思しも定めず」は注に<

主語は式部卿宮。真木柱の姫君の親権者は祖父式部卿宮。>とある。何も、式部卿宮の娘である姫君の母君が精神病で頼り無いから親権が祖父式部卿宮にある、と言うわけではない。今現在、姫は式部卿宮家に養われているし、何よりもその家格が親権者に相応しい高貴な地位に在るからに他ならない。少し意味合いは違うが、藤原殿の娘である弘徽殿女御も今上帝に入内する際には、「権中納言の御女、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿みたちて、儀式などいとあらまほし」(濤標卷三章四段)とあって、藤原殿が当時は権中納言と女御方に成るには低位だったので、娘の祖父である時の太政大臣の家格にしていたほどだ。それが、今上帝即位の年の事で今から十二年前のことだった。時に今上帝 11 歳、弘徽殿女御 12 歳。後で入内した式部卿宮(当時は兵部卿宮)の二女も「宮の中の君も同じほどにおはすれば」(濤標卷五章六段)とあったので、12 歳くらいだったか。今や今上帝 23 歳、弘徽殿女御 24 歳、王女御も 24 歳くらい。 \*「かけても」は<少しでも。いささかでも。>と古語辞典にある。猫と引きかけて>比べても、という語感の軽口調なのだろう。作者は式部卿宮と想定される宮家を相当に嫌っていたのか、もしくは貶めるべき政略性が実相として在ったのか、ともかく徹底的な引き立て役に設定している。痛快なほどに残酷だが、地位の高さは揺るぎ無いという強かさが、王家の一面を描いているようで面白い。

母君の、あやしく(母君が異様で)、なほひがめる人にて(今も悲観に暮れる人で)、世の常のありさまにもあらず(普通的生活ぶりでなく)、もて消ちたまへるを(すっかり地味にしていらっしゃるのを)、口惜しきものに思して(姫君は無念にお思いになって)、継母の御あたりをば(弟たちが明るく楽しげに暮らしているような、継母の御側での生活を)、心つけてゆかしく思ひて(憧れて羨ましく思って)、今めきたる御心ざまにぞものしたまひける(派手好きなご気性でいらっしゃいました)。

#### [第四段 真木柱、兵部卿宮と結婚]

兵部卿宮、なほ\*一所のみおはして(兵部卿宮は今だに独身でいらして)、\*御心につきて思しけることどもは、皆違ひて(気に入って結婚を考えなされた源氏養女の藤原姫や朱雀院の女三の宮などとは縁がなくて)、世の中もすさまじく(人生が味気なく)、人笑へに思さるるに(自分が世間の物笑いに思えなかって)、「さてのみやは\*あまえて過ぐすべき(これだけの人生だと甘んじて暮らしていて良いのか)」と思して(とお思いになって)、このわたりにけしきばみ寄りたまへれば(この姫君に色気を出して縁談を申し込みなされると)、\*大宮(式部卿宮は)、 \*「一所(ひとところ)」は<おひとり>という言い方で、「ところ」は高貴な人を数える助数詞的接尾語、と古語辞典に解説されている。注には<螢兵部卿宮は北の方を亡くして以後、独身生活。>とあるが、「北の方を亡くし」たことや「北の方」についての話は、少なくとも事情としては今までに語られていない、かと思う。ただ、子息がいる記事は何処かに在った気がする。 \*「御心につきて思しけることども」は<玉鬘や女三の宮を望んだことをさす。>と注にある。 \*「甘ゆ」を訳文は<甘んじる>と言い換えている。「甘ゆ(=甘える)」は一定の良好な状態を愉しむ、満足する、という語感だが、引いて見れば、一定の水準に馴らされている、より大きな力に許容された受身の状態という立場を自ら受け入れる(=甘んず)、ということと同根と思えるので、是は従う。 \*「大宮(おほみや)」は皇太后や内親王への敬称に語用されることが多いようで、此处でも姫の祖母にあたる式部卿宮夫人のことかと思ったが、此处では兵部卿宮に対して上位の宮ということで「大(おほ)」という接頭語が付いているらしい。紛らわしいが注は無い。

「\*何かは(良いでしょう)。 \*「何かは」は下に<あらむ>が省かれた定句で<何ということもない=問題ない=良いでしょう>。注には<以下「品なきわざなり」まで、式部卿宮の詞。娘の結婚相手の第一は帝、次いで親王だ、という考え。実際、宮の中の君は王女御として入内。大君は臣下の鬚黒大将の北の方となったが、離縁と

なった。>とある。この注に「式部卿宮の詞」とあるまで、私は上の「大宮」を夫人だと思っていた。さらに下にも「大宮」が式部卿宮を示す語用があるので、この「大宮」が式部卿宮だと分かった。

かしづかむと思はむ女子をば(大事に育てようと思う娘は)、宮仕へに次ぎては(帝への入内に次いで)、親王たちにこそは見せたてまつらめ(親王たちに差し上げようと思えばこそだ)。\*ただ人の、すくよかに、なほなほしきをのみ(臣下の堅物で平凡な者ばかりを)、今の世の人のかしこくする、\*品なきわざなり(昨今の世評で尊ぶのは、身分をわきまえない考え方だ) \*「ただうどのすくよかなほなほしき」は注に<鬚黒の性格が思い合わされる表現。>とある。「すくよか」は<堅実だ>。真面目一方で面白味がない、という語感。「なほなほし」は<平凡だ>。平均的な、という客観評価というよりは、優れていない、という劣性評価の語感。 \*「品(しな)」は<身分>。「品無し」は<身分制度によって成り立っている社会を心得ていない>。ただ、王家の者が是を言えば、下々に対して「汝、不遜なり」と言ってみ下していることになる。「わざ」は<事柄、しわざ>でもあり<仕方、考え方>でもある。

とのたまひて(と仰って)、いたくも悩ましたてまつりたまはず(然して兵部卿宮をお悩みさせ申しなさることもなく)、受け引き申したまひつ(ご承諾なされたのです)。

\*親王、あまり\*怨みどころなきを、さうざうしと思せど(兵部卿宮はこの縁談のあまりの滞りの無さに拍子抜けなされたが)、おほかたのあなづりにくきあたりなれば(帝の親筋に当たる権勢官家という世間体からして軽視でき難いお相手なので)、えしも\*言ひすべしたまはで(どうにも言い逃れなされずに)、おはしましそめぬ(真木柱の姫君にお通い始めなさいました)。 \*「親王(みこ)」は兵部卿宮のこと、らしい。推定 38 歳くらいだが、式部卿目線で見れば婿殿なので「みこ」と言う訳か。 \*「うらみどころ」は<残念なこと、嘆き言>だから、無いに越したことは無さそうに思うが、恋路の困難は遊び人にとっては手応えらしく、登山家は険しい山に挑戦するのが遣り甲斐らしいから、同様な充実感に通じるものか。訳文の<口説きがい>も上手い言い換えだ。 \*「言ひすべす」は「言い滑す」で<言い逃れる>。

いと二なく\*かしづききこえたまふ(式部卿宮家は兵部卿宮を婿としてこの上なく手厚く歓迎申しなさいます)。大宮は、女子あまたものしたまひて(式部卿宮には娘御が大勢いらして)、 \*「かしづききこえたまふ」は注に<式部卿宮家が蜚兵部卿宮を婿として。>とある。「かしづく」は、その家の者がく世話する=接待する>ということなのだろうか。兵部卿宮が姫君を自邸に引き取ったら、「かしづく」は兵部卿宮が姫君を<世話する>という意味になる、ということのようだ。

「\*さまざまもの嘆かしき折々多かるに(我が家の娘たちの結婚は色々と嘆かわしいことが多々あって)、物懲りしぬべけれど(もう考えたくない所だが)、なほこの君のことの思ひ放ちがたくおぼえてなむ(やはりこの姫君の行く末に幸あれと思わずにはいられません)」。 \*「さまざまもの嘆かしき折々」は注に<式部卿宮の大君は鬚黒と離縁、中の君は入内はしたものの立后が叶わなかった。>とされている。宮家の女たちの結婚についての不遇ではありそうだ。

母君は、あやしきひがものに、年ごろに添へてなりまさりたまふ(この姫の母親は妙に意固地に年々酷くなって行きなされる)。大将はた(父親の左大将は左大将で)、\*わがことに従はずとて(自分の意が及ばないということ)、おろかに見捨てられためれば(薄情にも見捨てられたようになっているのが)、いとなむ心苦しき(何とも不憫だ) \*「わがことに従はず」は<鬚黒の意見に式部卿宮

が従わない、の意。>と注にある。「従ふ」は<ある者が他者に服従する>という語感があって、式部卿宮が自虐的にこういう語用をした、のだとしても、その意で主語を補語すると、ややこしい文になる。その意は語感として汲みつつも、この「従ふ」は一般事象に対して<意に添って進展する>という意味に取りたい。

とて(と言って)、御しつらひをも(姫の御部屋の飾り付けまでも)、立ちゐ(立ったり座ったりして)、御手づから御覧じ入れ(祖父宮御自身で指図なさり)、よろづにかたじけなく御心に入れたまへり(すべてにもったいなくもお気遣い為さったのです)。

#### [第五段 兵部卿宮と真木柱の不幸な結婚生活]

宮は、\*亡せたまひにける\*北の方を、世とともに恋ひきこえたまひて(兵部卿宮はお亡くなりになった昔の夫人を何年過ぎても慕い申しなさって)、 \*「亡せたまひにける北の方」については、注に<故北の方は、右大臣の三の君、太政大臣の北の方(四の君)や六の君(朧月夜尚侍)の姉。「花宴」に「帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか」(第一章二段)とあるのが初出。「胡蝶」に「年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり独り住みにてわびたまへば」(第一章三段)とあった。「面影の人」を求めるのはこの物語の通貫したテーマ。>とある。私には印象が薄くて忘れていたが、そういう記事があったようだ。かつての右大臣の三の君だったのなら、現在の右家筆頭の左大将とも血筋が近く、であれば、兵部卿宮が真木柱の姫君を故北の方に似ているかも知れないと期待するのも肯ける。それにしても、兵部卿宮は女好きで遊び人だとずいぶん語られていた気がするが、故人を「世とともに恋ひきこえたまひて」いたとは意外だった。この物語は女房語り独特の話題によって人物の焦点の当て方が違って、以前とは違う意外な人物像が語られることも多いが、しかしそれは一貫性を欠くものというよりは、人間の多面性を言っているようで面白い。

「ただ、昔の御ありさまに似たてまつりたらむ人を見む(その昔の夫人に似た人を妻にしたい)」と思しけるに(と御思いでいらしたが)、「悪しくはあらねど(姫の器量は悪くはないが)、さま変はりてぞものしたまひける(亡き君とは違う感じでいらっしゃる)」と思すに(とお思いなので)、口惜しくやありけむ(期待外れだったのだろうか)、通ひたまふさま(姫の御部屋に通いなさる兵部卿宮の御様子は)、いともの憂げなり(とても億劫そうです)。

大宮、「いと心づきなきわざかな」と思し嘆きたり(式部卿宮はこの婿宮の御態度を、全く心外な、と思し嘆きなさいました)。母君も、さこそひがみたまへれど(母親の君も相当に病んでいらしたが)、うつし心出で来る時は(正気が戻って来た時には)、「口惜しく憂き世」と、思ひ果てたまふ(娘の結婚を、無念で可哀相な巡り合せだ、と落胆なさいます)。

大将の君も(父親の大將殿も)、「さればよ(思ったとおりで)。いたく色めきたまへる親王を(とても気の多い親王だからな)」と、はじめよりわが御心に許したまはざりしことなればにや、ものしと思ひたまへり(はじめから自分は認めていなかった結婚なので、何という事かと思いなさったのです)。

尚侍の君も(継母である尚侍君も)、かく頼もしげなき御さまを(このように頼りにならなような婿宮の御様子を)、近く聞きたまふには(継子の不幸として、身近にお聞きなされると)、「\*さやうなる世の中を見ましかば、こなたかなた、いかに思し見たまはまし(そのように自分が兵部卿宮との結婚生活をしてきたなら、養父の源氏殿や実父の藤原殿は、どうお思いになったことだろ

う)」など、なまをかしくも、あはれにも思し出でけり(などとかつての兵部卿宮が自分に言い寄っていた事を、すこし可笑しくも懐かしくも思い出されました)。\*「さやうなる世の中」は注に<以下「思し見たまはまし」まで、玉鬘の心中。「ましかば一まし」反実仮想の構文。蛍宮と結婚しなくてよかったという感想。「こなたかなた」は源氏と太政大臣をさす。>とある。「さやうなる」は尚侍自身が真木柱の立場で<兵部卿宮の嫁として>。「世の中」は<結婚生活>。

「そのかみも(あの当時も私は)、気近く見聞こえむとは(兵部卿宮に親しくお応え申そうとは)、思ひ寄らざりきかし(思ってもいなかったが)、ただ、情け情けしう、心深きさまにのたまひわたりしを(ただ宮が情趣深く熱心に言い寄って下さっていたのを)、あへなくあはつけきやうにや(今の夫と情交の済し崩しで、だらしなく一緒になってしまったように)、聞き落としたまひけむ(軽蔑なさっているだろうか)」と、\*いと恥づかしく(と大将夫人は宮に対してとても恥じ入って)、年ごろも思しわたることなれば(何年も思って来たことなので)、「\*かかるあたりにて(夫婦の話らいで宮が姫から)、聞きたまはむことも(私と大将殿との夫婦仲などを、お聞きなされるかも知れないことにも)、\*心づかひせらるべく(自分がだらしない女ではないと思って頂くように、気を付けなければ)」など思す(などとお思いになります)。\*「いと恥づかしく」は大将夫人が宮に対して抱く感情で、ということは夫人は宮に好意、少なくとも敬意は今も持っているらしい。継子の不幸を聞き知っても、親心ではなく女心で宮を思う、という語りのようだ。何というか、実に生々しい。\*「かかるあたり」は注に<夫婦の話らいの中で、蛍宮が継娘の真木柱から玉鬘の噂を聞く、の意。>とある。\*「心遣ひ」は<気遣い>。何をどう気遣うのか。夫人の関心は、宮に、自分は臣下身分ながらも自尊心のある女だということを認めてもらいたい、ということにあるようだ。それが、恋文の返事を唯一出した相手への、自分を好い女だと思わせたい女心、といったところなのだろうか。自分が知っている宮の情熱ぶりを考えれば、姫に冷淡なのは、少なくとも宮だけの所為ではない、と夫人は思っているのかも知れない。大将は実の娘の姫が可愛いだろうし、姫も大将を慕っていた。そして、姫は現夫人の華やかさに憧れてさえもいたらしいが、夫人は姫に然して愛情は持っていない。というか、その弟たちは一緒に暮らして見知っているが、姫は、前夫人が現夫人の輿入れ前に実家の宮家に連れ帰ってしまったので、現夫人は会ってもいないし、縁遠さからしても、自然に愛着が持てる相手ではないのだろう。

\*これよりも、さるべきことは扱ひきこえたまふ(大将家からも式部卿宮家に姫の御婚儀の一通りの御祝儀はお届け申しなさいます)。\*「これよりも」は注に<玉鬘方をさす。継母としての配慮。>とある。ということは<大将夫人からも>という言い方で<大将家からも>ではないらしい。ただ、「さるべきこと」は上文の「心づかひせらるべく」を受けて兵部卿宮に対する自分の世間体を意識したのでは無く、式部卿宮家に対して姫の婚儀をお祝い申し上げるという継母の立場の体裁を考えたもの、ということのようだから、結局は<大将家から>なんじゃないかな。

せうとの君たちなどして(姫の弟君たちを祝いの使者として)、かかる御けしきも知らず顔に(こうした婿宮の冷淡さも知らない顔をして)、憎からず聞こえまつはしなどするに(可愛げに祝言口上を申し遣わせなどすれば)、心苦しくて(祖父宮はその成長ぶりに感じ入って)、もて離れたる御心はなきに(姫も弟君たちも分け隔てする御心はなかったが)、\*大北の方といふさがな者ぞ(祖母である大奥様の方は聞かん気で)、常に許しなく怨じきこえたまふ(いつに変わらず大将家を許さずに非難なさっていらっしやいます)。\*「大北の方」は注に<式部卿宮の北の方。『集成』は「かつて継娘に当る紫の上の不幸を小気味よがったり(須磨)、玉鬘と髭黒の結婚について源氏をあしざまにののしったりした(真木柱)。そこにも「この大北の方ぞ、さがな者なりける」(真木柱)とあり、札付きといった扱い

と注す。この物語では、かつての右大臣の娘弘徽殿の太后とこの式部卿の北の方がつねに悪役といった感じ。>とある。確かにそうなのだろうが、悪役と言っても、その描き方は安っぽくはない。弘徽殿太后や大北の方の源氏殿や源氏勢力に対する批判や非難は実に的確で、客観的な正当性があり、低能な弱者とか無教養な乱暴者などという設定ではなく実に説得力があり、それこそがこの作者をしてこの作り話に真実味を与えている、というか実相を丹念に観察している、賢さのように思える。「さがな者」は<手に負えぬ者。やかましや。>と古語辞典にある。「さがなし」は<意地悪だ、口が悪い>とあるが、女房言葉の語感では<頑固だ←言い包められない←とても欺けない←経験的に真理を知っている>みたいな敬意が込められている気がする。と、これは真木柱巻三章四段の「さがな者」でも同様なノートをしていた。

「\*親王たちは(親王というものは)、のどかに二心なくて(家に落ち着いて浮気をせず)、見たまはむをだにこそ(妻と仲睦まじく勤めることこそ)、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ(華やかな生活がない見返りとすべきものと考えべきだ)」とむつかりたまふを(と大奥様が姫の不遇についても不平を仰るのを)、 \*「みこたちは」は注に<以下「思ふべけれ」まで、大北の方の詞。『集成』は「親王には政治的な権力がなく、婿取りしても世俗的な家の繁栄は望めないので、こうした愚痴にもなる」と注す。>とある。それにしても、さすがにというか、この大北の方の言葉は普遍的な真理を突いているような気がする。そこで、此処で少し「親王」や「王家」の立場について考えてみたい。で、国の成立の原生的な形態を想定するに、ある程度の組織動員力を有する権勢家の中から、その実力を基盤にしながらも他の権勢家と協調して、画期的な農業生産性の向上が見込める土木事業を系統立てて実現できるほどの富の蓄積規模に組織をまとめあげた一派が、その組織の頂点に立つものとして、結果として<王家>となった、と規定してみる。すると、その「王家」の役割は既に「国家」統一は果たしたので、後はその組織の体系の維持になってくる。是を<国体の維持>と規定する。すると、「国体の維持」の為には「王家」は権勢実務から離れなければならない。なぜなら、他の権勢家に業務を分担して、自らはその総合管理をする為には、具体事業からの中立がなければ他の権勢家からの協力が得られない。自らが事業参画しては客観的な立場に立てず、必ず他家から利益独占を疑われてしまう。と同時に、「国体の維持」には、その「国体」の構成員であることに誇りを持てるように国民をして主導しなければならない。「王家」が「人としてのあるべき生き方」を国民に示して、国民に生きる喜びや充足感を与えてこそ、その国は発展の原動力を得る。是を「権威」と規定する。ところで、「あるべき生き方」を示すのは言葉による認識の共有に他ならない。斯くして国家は宗教を求める。およそ事物を説明する論は、様々な方法が有り得る。「王家」はその多くの論の中から、その国の実情に即した最も説得力のある論を体系化して「国教」を定める。本来、宗教は、その組織が有する生産技術や学術体系や財務管理などの優越性があるからこそ、それを構築した土台であろう生活教条が光り輝くのであって、宗教国家の覇権主義は全くの本末転倒の筈だが、是が後を絶たないのは、始末が悪いことに、宗教が正に<人の生きるべき道>を指し示してしまうからだ。しかし、「人の生きるべき道」などは教条として一般概念化できるものではなく、具体事象に対してその都度向き合うものでしかない事を、人類は改めて確認し合わなければならない。一定条件下での共通目標認識の表象としての権威は体制の組織化に必要なだが、権威主義依存は人間が有機生命体であるが故に、飢餓状態を恐れる精神病だ。ただ、この克服には不断の認識共有化努力が強いられる。が、それ以外に未来は無い。話の主旨が逸れたが、つまり、「親王」だけでなく帝にあっても、「王家」には権力があってはならず、権威をもって国をまとめる役割が課されている、というワケだ。権威を磨くのは文化学術だが、是は権勢家が権威のお墨付きを得るために挙って研究費を寄付するので、「親王」だって立ち回りによっては華やかな生活は送れる筈だ。現に源氏殿が良い例だ。源氏殿は臣籍降下して王家と権勢家の良いとこ取りみたいな格好だが、少し世情に馴れれば親王身分でも十分に権威は売れるだろう。しかし、どんなものにも仕入れは必要だし、その為の資金も要る。ところが、身分社会にあっては王家は生まれつきの血筋なので、学術文化を極めなくても、国際社交に加わらなくても、努力無

して売り手で居られるので、投資も無い無競争下での商品劣化は避けられないのかも知れない。それでは買い手が見つからない。この詞の大意はそんなところか。何れ痛烈な批判だ。が、この奥様の夫こそが親王であり、奥様自身も王家血筋なら、一体誰に対する皮肉なのか。核心を突くほど自分の逃げ道も無い。

宮も漏り聞きたまひては(兵部卿宮も漏れ聞きなさっては)、  
「いと聞きならはぬことかな(これは異な事を耳にした)。昔、いとあはれと思ひし人をおきても(昔のとても愛した人を別にしても)、なほ、はかなき心のすさびは絶えざりしかど(他にもその場限りの寂しさを紛らす女遊びは止む事が無かったが)、かう厳しきもの怨じは(こうも厳しい移り気への非難は)、ことになりしものを(別に無かったものを)」、心づきなく(と祖母君の陰口が心外で)、いとど昔を恋ひきこえたまひつつ(ますます昔の亡き人を慕いなさりながら)、故里にうち眺めがちにのみおはします(その人と過ごした古い邸で懐かしく庭を眺めて物思いがちに過ごしなさいます)。

さ言ひつつも(そうは言いつつも)、\*二年ばかりになりぬれば(兵部卿宮と真木柱の姫君との夫婦生活も、二年ほど経ったので)、かかる方に目馴れて(こうした事情にも馴れて)、ただ、さる方の御仲にて過ぐしたまふ(ただそういう疎遠な御夫婦関係のまま暮らしなさいます)。\*「ふたとせばかりに」とは、また取って付けたように乱暴な話のまとめ方だ。まるで時間切れか、紙切れか、で心ならずも止むを得ず、または、特別な意図を持って此处で強引に下の文に続ける為なのか。何れこんなふうには、それも本筋の登場人物とは少し離れたところで、時間がすっ飛ぶのを、脱稿を疑わずに納得する人が居るとは思えない。